

## 日本キリスト教会大阪北教会

2017年10月8日(日)聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

### 聖書 エフェソの信徒への手紙5章21節～33節

05:21 キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい 05:22 妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。 05:23 キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。 05:24 また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。 05:25 夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。 05:26 キリストがそうなさったのは、言葉を伴う水の洗いによって、教会を清めて聖なるものとし、 05:27 しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした。 05:28 そのように夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。 05:29 わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえって、キリストが教会になさったように、わが身を養い、いたわるものです。 05:30 わたしたちは、キリストの体の一部なのです。 05:31 「それゆえ、人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。」 05:32 この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです。 05:33 いずれにせよ、あなたがたも、それぞれ、妻を自分のように愛しなさい。妻は夫を敬いなさい。

説教『キリストに仕えるように、互いに仕え合いなさい。』

◆私たちは使徒パウロのエフェソの信徒への手紙を読んで来ておりますが、新約聖書27巻の内、パウロの名による手紙が13通あります。そして、これらの手紙においては概ねその前段で「教理」的なことが記され、後段では「倫理」的なことが記されます。その特徴はこのエフェソ書においても変わりません。今日の箇所から「妻と夫」、「親と子」、「奴隷と主人」、「国家との関わり」等、そのような関わりの中で人生を送る私達一人一人が、如何にあるべきかを使徒パウロは示し、勧めております。

◆これらの勧めを聞く時に、私達は、これらの勧めをストレートに聞くべき時と、自分の立場に当てはめて聞くべき時があります。なぜなら、単純な事

ですが、「子」でない者はこの世に一人もいませんが、「親」でない人はいく  
らもおられます。また夫でも妻でもない人もあります。そして親子でも、親  
が高齢になって弱って来ますと、立場が逆転いたします。「老いては子に従  
え！」というように、親子の力関係が逆転するからです。

◆昨日いつもの床屋に行きました。金曜日に行くのと臨時休業の札が出ていた  
ので、昨日午後2時頃に行くと、お客さんが三人も待っていましたので、4  
時過ぎに改めて行きました。女性客が一人だけ待っていました。この床屋さ  
んはカットだけで、千円出すと1円お釣りをくれます。数分後終わりました。  
すると私が女性客だと思った人は、前のお客さんの御夫人で、旦那さんの付  
き添いで来ておられたのです。御主人は手足が不自由な方でした。

◆この聖書と云う書物は、永遠の真理を時代的制約の中で証ししていますか  
ら、自分自身に状況に応用して聞かねばなりません。いずれにせよ、わたし  
たちがどのような立場に身をおくにせよ、わたしたちが肝に銘じて、決して  
忘れてはならないことは、今日の箇所の冒頭にある勧告の言葉です。使徒パ  
ウロは21節において、「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いな  
さい」と、勧めております。私達にとって、何時いかなる時も決して忘れて  
はならず、肝に銘じていなければならない事は、この一事です。「仕える」  
と訳されたギリシャ語は「人の下に身を置く」という言葉です。この「仕え  
る」こそは、イエス様その御方の基本姿勢であります。それ故にこそ私たち  
はイエス様を「畏れる」のです。

◆使徒言行録の2章43節以下に、初代教会の信者の生活が紹介されていま  
す。そこにこうあります。「43 すべての人に恐れが生じた。使徒たちによっ  
て多くの不思議な業とするしが行われていたのである。44 信者たちは皆一つ  
になって、すべての物を共有にし、45 財産や持ち物を売り、おのおのの必  
要に応じて、皆がそれを分け合った。46 そして、毎日ひたすら心を一つにし  
て神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食  
事をし、47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうし  
て主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。」私達は今日、  
教会刷新のために工夫すべき事が多々ありますが、「キリストに対する畏れ」  
を欠くならば、一切は空転します。

◆「キリストに対する畏れ」とは、キリストに対する絶対の信頼と服従です。

ボンヘッファーは、Nachfolge＝「キリストへの聴従」と表現しました。主イエス・キリストは、この私と共に居まさざる時も所もなく、絶対の慈しみをもって、私と共に居てください、私のために、万事を益に変えて下さる、永遠の救い主です。

◆既に、本エペソ書の冒頭で、わたしたちは、このような福音を聞きました。3節です。「私たちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、私たちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました」と。私達は、イエス・キリストのお陰で、揺るがない神の平安に与っているのです。不滅の祝福、天の祝福の相続人なのです。

◆そして、主イエス様は、このいと小さい私に対して常にそうして下さるように、私が接する全ての人、一人一人と共に居まして、私に寄せて下さると同じ愛と配慮をもって共に居て下さいます。イエス・キリストは私たちが接する全ての人、一人一人と共に、一体的に共存しておられるのです。

◆カトリック教会で聖人とされたマザーテレサさんの歩みと共に、忘れがたい御言葉は、マタイによる福音書 25 章 31 節以下のイエス様の御言葉です。

『すべての民族を裁く』という小見出しの個所ですが、その 40 節に、主イエス・キリストの御言葉があります。「はっきりしておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と。この「はっきり」という言葉は「アーメン」が原語です。この一語は、絶対的な確認・確約を現す言葉です。イエス様が「アーメン」と言われたら、その言葉・内容は金輪際、変わることはありません。

◆わたしたちは、イエス・キリストの御体である教会の肢々です。わたしたちの体には、イエス・キリストの血が流れているのです。キリストの愛の血が、犠牲の血が、慈しみの血が、絶対の赦しの血が、思いやりの聖なる血が流れているのです。その事を肝に銘じていたく思います。

◆神の御独りの絶対的な御奉仕によって、わたしたち全ての者は、一人一人は愛され、守られ、支えられています。この世のいかなる出来事も、私の底なしの罪も、私の病も、私の死も、キリスト・イエスにおける神様の御愛から引き離す事はできません（参照ローマの信徒への手紙第 8 章 31～39 節）。

◆この 9 月 25 日に御許に召された福岡悠紀子姉は、この主イエス・キリストにおける崩れる事のない御愛の確かな証しを、私たちの心に刻みつけてく

れました。自由学園出身者や、「友の会」の関係者のお家には架けられている額がありますが、そこにはこう刻まれています。＜キリストはこの家の頭・全食卓の客人・全会話の聴聞者＞。牧師館の居間にもかかっています。この言葉の真実さを、悠起子姉が召される前日、あの讚美歌268番の歌詞を朗読し、共に「主の祈り」を唱えて、『アーメン』と唱和した時、今の今まで反応のなかった悠起子姉も『アーメン』と唱和され、そのお顔は苦しみを解かれ、澄み切ったお顔に変貌していました。神様は、御心の天になる如く、地にも為させて下さる御方だと、改めて思い知らされました。

◆「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい。」これが万家の家訓・万人の人生訓です。この一事を心に刻んで忘れないならば、後は自由に、思うままに行ない、語っても、その言動が、主イエス様の御心を傷つけることは決してないと思います。パウロは自分を「最も小さい者」と言いました。そして、最も小さいこの私に、神様は恵みを賜ったのですと言っています。要は、イエス様に対する心からの感謝、畏れ、讚美、信頼をもって、色んな形で関わる人々に仕えることです。ですからこの信仰においては、自分が何か、一角の者であるかのように思ったらお終いです。パウロは自分を「最も小さい者」と言いました。これはいわゆる謙遜な言辞ではありません。文字通り、最も小さい者に主は仕えて下さったのです。心からの感謝を捧げる以外にありません。このキリストに対する畏れをもって、互いに心から仕える道を、感謝をもって歩んでまいりましょう。

◆お祈りいたします。

恵みに富み給う主イエス・キリストの父なる神様。あなたは私たちを愛し、顧み、守り切ってください。その事を新たに感謝いたします。あなたがこのような者の救いの為に、全てを捨てて、捧げてお仕え下さったように、どうか私達も接する全ての人に対して仕えることが出来ますように、そしてあなたの限りない恩寵に、恵みに与って行けますように、そして、多くの人々が、全ての人々が、この救いに入れられて行きますように、どうか私達一人一人が身を献げる者であらしめて下さい。この祈り主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン。